

# 指揮の実際に於けるテンポの設定について

## —モーツァルトの「グラン・パルティータ」の場合—

梶原 征剛\*

### 1. はじめに

指揮者は音楽を創造していく過程において、音楽の本質に関するさまざまな現象、すなわち、アンサンブルのなかでのテンポ、リズム、アクセント、ディナーミクなどの設定と指示。さらに、各楽器間の音程、全体のサウンドや音量のバランスの調整などの役割がある。

これらの事柄のなかで、テンポのことについては、ほとんどの楽曲のテンポは作曲者自身により、メトロノーム記号や速度標語の言葉（単語）による速度記号によって指示されている。しかし、この指示はその楽曲の絶対的なテンポを示すものではない。したがって、指揮者は楽曲を演奏するにあたって、最初にその楽曲のテンポを設定する任務がある。

指揮者が楽曲のテンポを設定する際、一般的には作曲者が指定したテンポを十分に認知したうえで、その楽曲の表情や表現方法との関係、また、その楽曲と他の楽曲の相互間の事柄、たとえば、交響曲などにおける、第1楽章Allegroと第2楽章Andante、などのような急章と緩章の対比、さらに、演奏者個人個人とのさまざまな問題などを把握したうえで、自分が求めようとする音楽を十分に表現できるテンポを設定するものである。

今回は、Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) が作曲した、セレナード第10番 変ロ長調 K.361「グラン・パルティータ」(Gran Partita) を例にあげて、ウィリヘルム・フルトヴェングラー (1886-1954) カール・ベーム (1894-1981) サー・ネヴィル・マリナー (1924-) ニコラウス・アーノンクール (1929-) フランス・ブリュッヘン (1934-) ミラン・トルコヴィッチ (1939-) クリストファー・ホグウッド (1941-) エド・デ・ワールド (1941-) 以上8名の指揮者を選び、それぞれの指揮者がこの楽曲を演奏するにあたって、どのようなテンポを設定しているか。また、その実際の指揮法について考察を試みてみたい。なお、Belwin Millsの出版による楽譜を使用する。

### 2. セレナード第10番 変ロ長調 K.361「グラン・パルティータ」

モーツァルトのセレナードと言え、弦楽セレナード ト長調 K.525「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を誰でも連想するが、この作品も13曲あるセレナードのなかの一つである。この作品が初演されたのは、1784年3月ウィーンのブルグ劇場であるが、作曲されたのは1781年初めミュンヘンで、当地の優れた宮廷楽団の管楽器奏者たちのために着手され、その後、ウィーンで完成さ

\* 茨城大学教育学部音楽研究室

れたと考えられる説と、1784年、当時ウィーンの名クラリネット奏者であった、アントン・シュタットラー<sup>1)</sup> (1753-1812) の依頼によって書かれたとする両説があり現在もまだ確定していない。しかし、近年の研究では、A. シュタットラーの主宰する慈善演奏会のために作曲された1784年説が有力となっている。

この作品は、楽章構成と楽器編成の点からみると、モーツァルトの同系統<sup>2)</sup> の作品に比較して非常に規模の大きな作品となっており、「グラン・パルティータ」= (大きな組曲) と言う名前の由来もこうした理由からつけられている。

楽章構成は、

- 第1楽章 Largo - Allegro molto
- 第2楽章 Menuetto - Trio I. II.
- 第3楽章 Adagio
- 第4楽章 Menuetto (Allegretto) - Trio I. II.
- 第5楽章 Romanze (Adagio - Allegretto - Adagio)
- 第6楽章 Theme mit 6 Variation (Andante)
- 第7楽章 Rondo (Allegro molto)

の7楽章であり、セレナードのなかでも、第7番 ニ長調 K.250 「ハフナー」(8楽章) 第9番 ニ長調 K.320 「ポスト・ホルン」(第7楽章) と共に、ほぼ同じ楽章数を持った大曲となっている。

楽器編成について言えば、当時の管楽器のためにセレナードは、2本のオーボエ、2本のクラリネット、2本のファゴット、2本のホルン合計8名編成が標準的であり、セレナード第11番 変ホ長調 K.375、セレナード 第12番 ハ短調 K.388の2曲もこの楽器編成で書かれている。

しかし、この作品の楽器編成は、

- Oboe I. II. Clarinet I. II. Bassett horn I. II.
- Fagotto I. II. Horn I. II. III. IV. Contrabass I.

合計13名であり、数も大幅にふやしてメンバー構成の点からも規模の大きさがうかがえる。

現在は、コントラバスの変りにコントラファゴットを使用する場合も多く、したがって、13名の管楽器奏者で演奏されることから、通称「13管楽器のためのセレナード」とも呼ばれている。

さらに、楽器編成で注目すべきことは、当時あまり使用されていなかったクラリネットを積極的に用いたばかりでなく、さらにそのうえ独奏楽器としての役割を持たせたことである。また、同属のバセットホルン<sup>3)</sup>を加えることで、一方では音色、音質の統一化をはかり、また一方では、他の楽器と組み合わせることによって多彩な和音の響きを生みだしている。このような豊かで重厚な色彩感あふれるサウンドにも、この作品の大きな特徴がみうけられる。

モーツァルトはその短い生涯において、この曲を含む数多くの管楽器の作品を主に協奏曲や室内楽の分野で残しているが、今なお、そのほとんどの作品は珠玉の名曲として燦然と光輝いている。

また、これらの作品が後生の作曲家の模範となって、その後、数多くの管楽器の優れた作品が誕生している。特に、リヒャルト・シュトラウス<sup>4)</sup> (1864-1949) は、この作品とまったく同じ13名で、楽器編成もほとんど変えず、しかも曲目も同じ「13管楽器のためのセレナード 変ホ長調」と「13管楽器のための組曲」の2曲の作品を書いているほどであり、これはまさに、この「グラン・パルティータ」が後生に与えた影響力の大きさを物語るものであろう。

## 3. 8名の指揮者の第1楽章 Largo - Allegro moltoのテンポ設定

第1楽章、冒頭のLargoからAllegro moltoへと進んでいく音楽は、この大曲にふさわしく堂々としたもので、この楽曲全体を象徴するかのように非常に印象的な音楽である。また、この楽曲のなかでも、もっとも緩・急の対比が顕著に表れたところでもある。それで、全曲のなかからこの部分の音楽を取りあげて8名の指揮者のテンポ設定について考察を試みたい。

まず、音楽はゆっくりした序奏(Largo)で全楽器による力強い*f*による和音の総奏(*tutti*)と、その総奏に答えるかのようなクラリネットの独奏(1~5小節目)との対話で始まる。そして、クラリネットとオーボエのかけあい(5~6小節目)へと続き、そのかけあいが高音楽器群と低音楽器群(7~8小節目)へと受けつがれる。さらに音楽の流れは、クレッシェンド(11小節目)を経て、オーボエとクラリネットのカデンツ風な独奏(12~13小節目)へと続いていき、突然、*f*の総奏によるフェルマータ(14小節目)でいったん音楽の流れがとまる。そして、Allegro moltoへと音楽は進行していく………………。 (楽譜参照)

**SERENADE N° 10** 800-1  
(Gran Partita)  
für 2 Oboen, 2 Clarinetten, 2 Bassethörner, 4 Waldhörner,  
2 Fagotte und Contrafagott oder Contrabass  
von **W. A. MOZART.** Serie 9. N° 12.  
Mozart's Werke. Köch. Verz. N° 361 (Köch.-Einst. N° 370a).

Largo. Componirt vermutlich im ersten Halbjahr 1781 zu München und Wien.

Largo.

2-400

A musical score system consisting of ten staves. The top staff is the vocal line, followed by five piano staves (treble clef) and two bass staves (bass clef). The music is in a major key and 4/4 time. It features a complex texture with many sixteenth and thirty-second notes, particularly in the piano parts.

A musical score system consisting of ten staves, continuing from the previous system. It includes the same vocal and piano parts. The piano parts are marked with *trist.* (tristezza) and *rit.* (ritardando) in several places. The system concludes with a double bar line.

**Allegro molto.**

400 3

A musical score system consisting of ten staves, starting with the tempo marking **Allegro molto.** at the bottom left. The system includes the same vocal and piano parts. The piano parts are characterized by a driving, rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes. The system concludes with a double bar line.



この楽曲の冒頭に指示されている速度記号のLargo<sup>5)</sup>は大きいとか、広いと言う意味を含んだ一非常にゆっくりした速度で一とあり、また、Allegro<sup>6)</sup>は一快速に一、molto<sup>7)</sup>は一きわめて一であり、Allegro moltoは一きわめて速く一と、一般的には解釈されている。しかし、元来音楽用語はその言葉(単語)が持っている意味の大意は示しているものの確定的なことを断定するものではない。この場合でも、〈ゆっくりした速度〉とあるが、どの程度のゆっくりした速度であるのか、明らかでないように非常に曖昧な表現をするものである。(例外として、メトロノーム記号は数字で明瞭にその速度を示しているが、これとて一つの目安であって絶対的なものではない)

しかし、ここでは理解しやすくするために便宜上メトロノーム<sup>8)</sup>記号で、その速度を数字で表すことにする。それによると、一般的にLargoは、♩=40~60であり、Allegroは、♩=120~168である。さらに、Allegroには、molto=きわめて、が加えられているので、その数字はさらに大きくなるであろう。

8名の指揮者が実際に演奏している音楽は、それぞれが設定したテンポで物理的に終始変わらず演奏されるものではない。そこで、平均的なテンポをメトロノーム記号の数字でLargoとAllegro moltoを表わすと下記ようになる。

Largoのテンポ設定について注目すべきことは、8名の指揮者のなかで一番遅いテンポ設定をしている、F.ブリュッヘンが、♩=30。もっとも速いテンポのK.ベーム他の3名が、♩=35であり、8名全員が一般的なLargoのテンポ(♩=40~60)より大きくかけはなれて、メトロノームにも記載されていないほどの非常にゆっくりしたテンポ設定をしていることである。

これはいくつかの理由があるとおもわれるが、それを考察すると、テンポを遅くすることで、冒頭の総奏で演奏される重厚な和音の響きをより荘重に表現でき、さらに、

指揮者	速度記号	Largo	Allegro molto
W.フルトヴェングラー		♩=33	♩=184
K.ベーム		♩=35	♩=168
N.マリナー		♩=33	♩=176
N.アーノンクール		♩=35	♩=152
F.ブリュッヘン		♩=30	♩=150
M.トルコヴィッチ		♩=35	♩=148
C.ホグウッド		♩=35	♩=180

これに答えるクラリネットとオーボエの独奏が表情豊かに、しかも自由にうたえること。また、11小節目のクレッシェンドからオーボエ、クラリネットの独奏を経て、フェルマータに至るまでのクライマックスを劇的に表現できることなどがあげられよう。さらに、LargoとAllegro moltoの緩急のテンポの対比をはっきりと示そうとしたとも考えられよう。

第1楽章のLargoからAllegro moltoへと進む緩急の急激なテンポの変化は、本来ならば、音楽の流れにやや不自然さが表われても不思議はないのだが、8名の指揮者の演奏にはまったくその違和感が感じられない。8名のそれぞれの指揮者の演奏はLargoを非常にゆっくりしたテンポで演奏し、その音楽の流れをAllegro moltoへ入る直前の小節（14小節目）につけられたフェルマータで十分に音を持続させて、それまでの音楽の流れをいったん止め、そして、少しの間をとって、Allegro moltoへと進めている。このフェルマータで音楽の流れを止めることが、丁度クッションのような役割を果たしてLargoからAllegro moltoへと進む急激なテンポの変化を緩和させているのである。すなわち、このフェルマータの取り扱い方、解釈が次に続くAllegro moltoのテンポ設定に直接重要な影響を与えている。したがって、このフェルマータが第1楽章の音楽創りに大変重大なキーポイントを担っていることにもなる。

8名の指揮者がLargoをほとんど同じようなテンポ設定しているのに比較して、Allegro moltoは、F.ブリュッヘンの♩=150から、W.フルトヴェングラーの♩=184であり、かなりの数字的な開きがある。そのなかでテンポの緩急の差がもっとも大きい、W.フルトヴェングラーは、このフェルマータに約6秒もの十分な時間的な余裕を持たせている。そして、これに続くAllegro moltoを♩=184と言う、かなり急速なテンポ設定をしているにもかかわらず見事な調和を示した演奏を披露している。例外はあるが、総じて緩急の差が著しいテンポ設定をしている指揮者ほど、このフェルマータに長い時間を費やして、これを十分に活用しAllegro moltoへと進めている。

#### 4. Largo - Allegro moltoの指揮の実際

次に、この部分の音楽を実際に指揮をするにあたっての方法を考えてみたい。Largo, Allegro molto共に4/4拍子で書かれているので、通常の指揮法であれば1小節を4分割するオーソドックスな4/4拍子の図形を描く方法が基本である。Largoを実際に指揮する場合、その例として冒頭の2小節間に指揮をする時の拍頭、すなわち、カウントまたは点<sup>9)</sup>を楽譜上に記入すると譜例1となる。しかし、今回取りあげた8名の指揮のように♩=30~35と非常にゆっくりしたテンポに設定しているような場合は、基本的な4分割の方法では演奏の面でやや不安感を伴うのではないかと思われる。なぜなら、テンポが非常に遅いため指揮棒の動きがきわめて緩慢となり、各拍頭のポイントや冒頭のインザツツ、また、2拍目の16分音符に入る時の音のきっかけなどが演奏者一人ひとりに正確に伝わりにくくなるからである。さらに、クラリネットが独奏する2小節目の4拍目などのように、1回（1拍）の棒のゆっくりした動きのなかに32分音符を8つも演奏しなければならず、全体のアンサンブルが乱れる原因となる心配があるからである。そこで、これを解決するために、この4分音符を2つに分けて、8/8拍子として1小節を8分割する方法、譜例2が考えられる。しかし、8/8拍子の指揮法の場合、4/4拍子としての音楽の流れが失われる問題は残るが、棒の動きが緩慢となるがゆえに起こる、さまざまなマイナス点を考慮するとこの方法が適していると思われる。

8/8拍子の実際の指揮法で重要なことは、1小節が8つの拍頭を持つことになり指揮棒の描く図

## 譜例 1

Ob. I

Cl. I

1 2 3 4 1 2 3 4

## 譜例 2

Ob. I

Cl. I

1 2 4 6 8 1 2 4 6 8

形が複雑となるので、1, 3, 5, 7の表の拍頭おもてをはっきりと示すことはもちろんのこと、特に大切なことは、1拍目、5拍目の強拍とアフタクト（8拍目）の棒の動きを演奏者に図形的にも明瞭に理解できる動作をすることが重要である。なお、4/4拍子と8/8拍子のどちらの方法を選ぶにしても、その選択権は指揮者にゆだねられる。

また、Allegro moltoの指揮法は基本的には4/4拍子のオーソドックスな方法でよいと思われるが、♩=180くらいになると、今度は逆にテンポが速すぎるため、棒の動きが早すぎて演奏者にとってせわしく目ざわりに感じられたり、腕を激しく早く動かすために疲労が重なり、棒の動きが無意識のうちにだんだん遅くなりテンポが乱れる可能性もでてくる。そこで、Largoの時とは反対に1小節を2分割（2/2拍子）する方法がある。この場合も、選択は指揮者に一任される。

## 5. おわりに

モーツァルトの「グラン・パルティータ」第1楽章 Largo-Allegro moltoの部分の音楽について8名の指揮者のテンポ設定と、それに伴う指揮法のことについて少し述べてきた。8名の指揮者がこの作品に対してそれぞれ違ったテンポ設定して演奏しているのと同じように、この作品の音楽に関する総合的なイメージや解釈に基づいた表現法は各自異なるものである。音楽用語はその大意は示すものの非常に曖昧な表現をするものと前述したが、この曖昧さが、自分が持っている音楽上のさまざまな知識や感性を幅広く受け入れ、また、自己の独創性を生みだす音楽の自由な表現を可能にしているのである。

この作品は実際に13名の演奏者と1人の指揮者で演奏されるが、演奏者一人ひとりのこの作品に対するイメージや解釈はここでも当然異なるものである。それを統一する事が指揮者に与えられた大きな役割の一つであり、指揮者は自分が求めようとする音楽を有効に最大限表現できるように演奏者各自に伝達し、意見を交換しあいながら共通の認識のうえに立って演奏者と共に音楽を創造し

ていくのである。

### 注

- 1) クラリネットの奏法を改良し、親友でもあったモーツァルトが、「クラリネット五重奏曲」「クラリネット協奏曲」を捧げた。
- 2) Cassazion, Divertimento (嬉遊曲) がある。
- 3) F管の少し大型のクラリネットで、モーツァルトの「レクイエム」などに使用されている。
- 4) ドイツ最後のロマン派の作曲家で、「英雄の生涯」をはじめ多くの交響詩を含む作品がある。
- 5) 『標準音楽辞典』(音楽之友社 昭和41年) P.1347
- 6) 『標準音楽辞典』(音楽之友社 昭和41年) P.44
- 7) 『標準音楽辞典』(音楽之友社 昭和41年) P.1296
- 8) Wittner (ドイツ) Zen-On quartz (日本) SEIKO quartz (日本) を使用。
- 9) 斎藤秀雄 『指揮法教程』(音楽之友社 昭和49年) PP.5~8

### 参 考 資 料

- W. A. MOZART SERENADE No.10 K.361 Belwin Mills Publishing Corp. MELVILLE, N. Y. 11747
- W. A. MOZART SERENADE No.10 K.361 SOLISTS OF VIENNA PHILHARMONIC ORCHESTRA COND. BY WILHELM FURTWÄNGLER EMI TOCE-6059
- W. A. MOZART Serenade No.10 K.361 Berlin Philharmonic Orchestra Conductor: Karl Böhm DEUTSCHE GRAMMOPHON POCG-6059
- MOZART SERENADE KV 361 GRAN PARTITA ACADEMY OF ST. MARTIN-IN-THE-FIELDS Conducted by SIR NEVILLE MARRINER PHILIPS 412 726-2
- MOZART Gran Partita Wiener Mozart-Bläser Direction NIKOLAUS HARNONCOURT TELDEC 8.42981
- MOZART Serenade in B flat, K.361 GRAN PARTITA Members of the ORCHESTRA OF THE 18TH CENTURY Conducted by FRANS BRÜGGEN PHILIPS 422 338-2
- W. A. Mozart SERENADE No.10 "GRAN PARTITA" in B-Flat Major, K.361 ENSEMBLE OCTOGON Milan Trucović conductor camerata 32CM-91
- W. A. MOZART Serenade K.361 "Gran Partita" AMADEUS WINDS directed by CHRISTOPHER HOGWOOD L' OISEAU-LYRE F32L-20325
- MOZART Serenade in B flat "Gran Partita" KV 361 NETHERLANDS WIND ENSEMBLE Conducted by EDO DE WAART PHILIPS 420 711-21